

劇評

芝居は“人恋しさ”に始まる！

◎文化座「パートナー」

オフィス樹「蟻たちへの伝言」

THE・ガジラ「tatsuya／最愛なる者の側へ」

OPEN SESAME「クラウンのいる風景 —星の砂漠」

浦崎浩實

ワタクシことながら、たまに反省して82歳になる独り暮らしの母とひととき生活を共にすると、驚くことがある。実に小まめにテレビドラマを見ている。どこのご高齢の方でもそうなのだろうか。

何か用事を足していても、その放送時間がある、アッ始まってしまおう、とか言ってテレビのある部屋に移動。新作はもとより、夕方4時5時台の旧作の再放送作品にもお気に入りを見つけ、「これ、面白いのよ」と私に相伴を勧めるのだ。若い時は進んで映画や芝居を観る人ではなかったのに。

人恋しさがそうさせるのか、と思うと自責の念にかられてくる。木庭久美子「作、越光照文」演出、文化座公演「パートナー」(紀伊國屋ホール)を観ながら老母のことがつい頭をよぎったのも、この芝居が「人恋しさ」をモチーフにしているからなのだ。

思えば、芝居とは、人恋しさの別名かもしれない。小説や映画なら、ひよっとしたら人間嫌いという立場で作れるかもしれないが、芝居は生身の人間が舞台を闊歩する以上、いかなる形でも人間を嫌っては成立しないのである。

人は一人で暮らせるか、暮らせるはずがない、というのが本作のメッセージで、人間の関係が厳しさよりも、寛容さを自明の前提のように展開する。商業演劇と見まがうほどに予定調和なのだが、そのこと自体に不満はないけれども、この寛容さ、やさしさが広い人間観察の見地から出された結論というより、ただ作者(たち)が人見知りをするせいゆえに思われてならないのだ。

というのも、せっかく結婚仲介業という有象無象が出現する場を設定しながら、そんな未知の人が彼女たちの生活や価値観に割り込んで新展開することはない。二人は結局は旧知のクラスメートとか、かつての恋人など、いわば身内のまなざしに保護されており、ラストに至って、かおるは別れた夫とヨリを戻し、とも子も古い恋人と結婚。芝居が始まった時点より、二人がずっと後退した印象を否めないのだった。

つまり、ここには「他者」がいない分、人恋しさが不十分というか、淡泊なのだ。舞台真ん中をアコディオン、

カーテンで寝に仕切り、下手側を接客室、上手側をパソコンや電話などを置いた事務室として、終幕のパーティ会場を除けば芝居がいつも舞台のどっちか片側だけで演じられがちなのも、芝居の力感を損なっているだろう。それは人物の台詞が、立体的に組み立てられていないことを露わにする。

花季実子「作、石川妙子」演出、オフィス樹公演「蟻たちへの伝言」(東京芸術劇場小ホール2)もまた、人恋しさの芝居である。独身だった高齡の伯母が倒れ、そのマンションに姪、甥たちが集まってくる。早くも遺産を当てにした者もあり、故郷の仙台からも従兄弟たちがやって来るが、彼らの話の行き着く先も遺産にあり、いわば逆説的に人恋しさが語られるのだ。

一時間半ほどの、簡潔な人間喜劇といった趣の作品で、舞台上に実際登場する八人の親族の背後に陸続と血縁が控えており、この大家族に懐かしさを喚起される観客は少なくないに違いない。この場にはいない伯母の存在が、その弟妹た

ち、つまりここに打ち揃っている姪甥たちの親の時代、さらに祖父母の時代の親密な人間関係の風景に立ち返らせる。

濃密過ぎる関係に疲れたのか、失踪した本家の跡取りとか、兄嫁との確執の果てに精神を病む姪といった、血の濃さゆえに壊れてしまう関係にも、いろいろ目配りがあるが、ただ、そういう肝心な話が座敷でベチャクチャ喋るレベルにとどまり、演劇的な位置にまで高められていないのは惜しまれるだろう。

出演者の中では甥姪の総領格である藤子(野片佐世子)の生活感がいい。彼女は伯母を近所に住ませ何かと面倒を見てきたという役割を与えられており、利害を超えた誠実なたたずまいは、そのまま芝居の「忠」なのである。

鐘下辰男「作・演出、演劇企画集団THE・ガジラ公演「tatsuya／最愛なる者の側へ」(サ・スズナリ)の主人公は全身で、人が恋しい恋しい、と発し続けているといつてよい。「最愛なる者」はナゾめいていて、芝居を観るまではっきり、犯罪者tatsuya当人

を指し示し、作者の主人公へのシンパシイを醸っているのかと思つた。

それもあるかもしれないが、Latsuyaの精神的欠落感を埋めあわせるはずの、名づけ難い、ある混沌とした存在の謂いらしい。

この主人公は、いわゆる「連続射撃魔」こと水山則夫をモデルにしているのだが、そんな三〇年も昔の事件より、たつた今、現実には池袋の路上における無差別殺傷という造田博容疑者の事件が持ち上がったばかりである。池袋のこの事件に衝撃を受け、私もまた、ある解決できない感情を抱いたまま、「Latsuya」を観る羽目になったのだ。

類似の事件、人物が新たに現われたことが、この芝居にとつて良かったのか悪かったのか。それは分らないが、Latsuyaが、今や水山と造田の二人を抽象した人物として我々の前に提示されているのは疑いようもない。

二人はよく似ており、親に捨てられ、貧しくて進学もできず、仕事は当人のプライドを満足させる種類のものではな

かった。好意を寄せる者は皆無に等しくて、「世界」は彼(ら)の意志に反し常に対立、立ちほだかつてくるのである。

Latsuyaを演じるKONTAは色白で繊細さを秘め、そのはかなげな身体がひたすら、いじめに耐えて縮こまっていた。だから、死刑になる最後の最後まで闘争的だった水山より、どこか弱々しげな造田(全て解明されているわけではないが)の方に、Latsuyaは近いのかもしれない。

どうも現実と芝居と、双方の振幅の中で芝居に接してしまい、我ながら困惑している。それだけ芝居に、現実には負けない強さがあったというべきなのだろう。

上演パンフでKONTAが「死んだ者にとんだロイズムがあるというのだから」と書いているが、そういえるかもしれない。でも、そうでないかもしれないのだ。こんな書き方は劇評のテイをなさないだろうが、おそらく本作の作者も、現実VS芝居というフィクションの、苛烈な振幅の中に多くの留保を行なっているのである。そのことが「Latsuya

」の美点でもあり弱さにもなっているかもしれない。

照明(中川隆二)が素晴らしい。セツトラしいセフトはなく、照明の具合で、そこが独房にもなれば、安アパート、主人公の労働の場、逃げ惑う路地の断間、といった具合に鮮やかに変化するのだ。

OPEN SESAME公演「クラウンのいる風景 ―星の砂漠―(シアターモリエール)は、RONE&GIRIという珍しい女性のクラウン(道化師)が中心の集団による。クラウンの哀愁を帯びたあの人恋しさは、女性の手により一層心優しさを与えられており、クラウンの東の間の王者としての「夢」の表出、その奇術の数々はひよつとしたらこのステージでは狭かったのではないか。

ところで、狂言師で総合芸術家の野村万之丞による第一回監督作品「萬歳楽」は、映画なのだが、タイトルから察せられるように主題は演劇である。「劇」の放つ幸福感を追求した作品で、広く観賞をお勧めしておきたいと思う。東京・BOX東中野にて10月30日から公開。